

科学と社会

第5回

国家・学問・戦争の諸相

挑むための受容

岡本 拓司

前回は、明治20年(1887年)前後、憲法制定、外交、教育政策などの諸方面において、西洋の枠組みを受け入れて変革を行いながらもそこに日本の歴史や文化の継続性を保つ方法が見出されていった過程や、独自性を発揮しながら国家存続のために西洋の枠組みの中で戦いを続けていく覚悟が明らかにされていった経緯について論じた。言い方を換えれば、明治維新後の日本で、西洋化と伝統保持をどう両立させ、またその両立の仕方をどう正当化するかという問題にどのような答が与えられたかを論じたのであるが、同じ時期、同様の課題は、西洋型の学問の習得を要求された若者たちにも突きつけられていた。今回は、自然科学を含む学問の世界の動向について論ずることとしたい。

5.1 学者は世界と戦う

明治維新後、それ以前の伝統とは異なる西洋型の学問を、時には西洋語によって学ばなければならなかった若者たちが、どのような意識を抱いていたかを知るための手がかりは、例えば夏目漱石(1867-1916)の回想¹⁾の中に見つけることができる。

漱石は十代半ば頃から文学に興味を覚えていたが、これが職業になるかどうか確信を持っていないで、東京大学予備門に入る頃には、建築ならば

趣味のある職業でありながら社会にも必要とされると考えるようになっていた。ところが、予備門(在学中の明治19年に第一高等中学校となる)で出会った哲学志望の米山保三郎(1869-1897)に、日本で腕を揮ったところでセントポール大寺院のような建築を残すことはできないと説かれ、再び文学を志すようになった。それでも、進学した帝国大学では漢文科や国文科は選ばず、「英語英文に通達して、外国語でえらい文学上の述作をやつて西洋人を驚かせやう」との希望をもって英文科に進んだという。

米山も漱石も法学・工学・農学といった実用的な分野を志さない点が共通しているが、このように「趣味を持った職業」として学問を目指した若者たちは、明治20年頃には、世界にむけて何事かを問おうという姿勢を、ごく自然に持っていたようである。米山は、日本で建築家になっても世界に成果を問うことはできないと言い、漱石は、外国語の著作で西洋人を驚かせようと考えて英文科に進んでいる。

漱石とほぼ同時期に予備門にいた南方熊楠(1867-1941)の場合は、西洋への態度は米山や漱石よりも攻撃的である。南方は、イギリス留学中の明治30年(1897年)3月16日、大英博物館の東洋書籍部の部長、ロバート・ダグラス(Robert

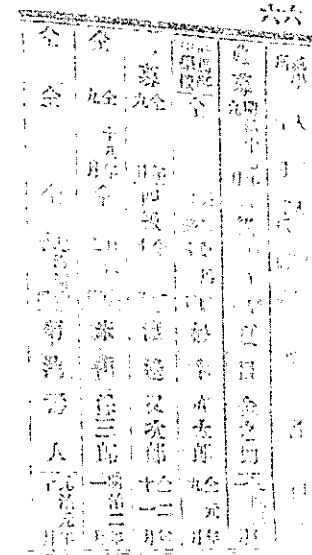


図5.1 『第一高等中学校一覽 自明治二十二年至明治二十三年』より、一部第二年三之組(文科)の名簿の一部。夏目漱石(金之助)と米山保三郎の名前がある。

Kennaway Douglas, 1838-1913)の部屋で孫文(1866-1925)に出会っている²⁾が、孫文に一生の所期を問われて、「願わくはわれわれ東洋人は一度西洋人を挙げてことごとく国境外へ放逐したきことなり³⁾と答えた。孫文が狼狽するのを見て、南方は「この輩いずれもあんまりえらい人物ならざる」を知ったと回想している。南方の研究はこの態度を反映しており、外国人に日本のことを知らせるばかりでなく、「外国には日本よりつまらぬこと多きを必ず付記して警告」するよう努めたという。

南方は、西洋で出会った日本への差別的言辭の一切に反駁し、例えば日本は南米の如しと言われれば英国はアフリカの如くなるべしと応じた。彼の、外国で「奉公」しながら自国の言い分を通したという自負の基本には、科学を西洋人の独占であるかのように言うのは誤りであり、東洋にも「科学智識」の発達があったという確信や、欧米人にも「条理の立たぬ議論」が多いという観察があった。南方の例からは、成果を西洋に問おうという気概が、ときに、まだ不安定であった日本の国際的な地位への意識もあって、学問上の議論で西洋

人と対決しようという攻撃的な姿勢に転化する場面もあったことが分かる。

文学を志す者でも、世界を念頭に置くという傾向は、大正に至っても引き継がれていた。大正5年(1916年)1月20日の川端康成(1899-1972)の日記には、大正2年(1913年)にアジア人として初めてノーベル賞を受賞し、当時来日の噂もあったインドの詩人タゴール(Rabindranath Tagore, 1861-1941)を意識してか、以下のような一節がある。「俺はどんな事があろうとも英仏露独位の各語に通じ自由に小説など外国語で書いてやろうと思つてるのだから そしておれは今でもノベル賞を思はぬでもない 尚私はエスペラント語を主用語としたいと思つてるのだ 語尾が品詞によつて同じだから詩などの声調はうまくゆくと思つてる⁴⁾。川端も漱石と同様、東京帝国大学では英文科に進んだが、後に国文科に移っている。

5.2 世界共通の競争の場

西洋に向けて作品を発表しようとした漱石は、しかし、次第に専攻していた英文学に疑問を覚えるようになっていた。イギリス留学中の自分を振り返って、漱石は、「西洋の詩などのあるものをよむと全く感じない、それを無理に嬉しがるのは何だかありもしない翹を生やして飛んでる人のやうな、金がないのにあるやうな顔して歩いて居る人のやうな気がしてならなかった⁵⁾と述べている。勉学が進むうち、母語ではない言葉で書かれた作品を評価することの困難を思い知るようになったのである。

そこへ、化学者の池田菊苗(1864-1936)がドイツからやってきて、漱石の下宿に泊まった。池田と議論するうち、漱石は、「組織だつたどつしりした研究をやろう」と考えるようになった。同時期に寺田寅彦(1878-1935)に書いた手紙(明治34年9月12日付)⁶⁾でも池田との邂逅について触れており、「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文学なんかは椽の下の方持日本へ帰つても英吉利に居つてもあたまの上がる瀬は無之候」

と書いている。寺田には、「君なんかは大に専門の物理学でしつかりやり給へ」と助言し、自分も英国科学振興協会で発表された原子論に関する演説を読んで「何か科学がやり度なつた」と告げた。

西洋に向けて作品を問おうとした漱石は、言語の習熟度によって表現の制限される文学は、物理学や化学のような「コスモポリタン」な領域ではないことに気づいたのである。明治維新後20年から30年を経て、学問において西洋に挑戦しようとしても、それが成り立つ分野とそうでない分野があることに、研究の最前線にいる人々は気づこうとしていた。漱石自身の「組織だつたとつしりした研究」は、例えば彼が帰国後にに行った講義、『文学論』¹⁾に結実したと見ることもできる。しかし、漱石がこれを講じたのは日本の学生に対してであった。学問の個々の領域には、それぞれ固有の「聴衆」があり、すべての分野が世界中の人々に向けて成果を問う必要はないのである。

漱石と同様の観察は、近代鳩山家の祖、鳩山和夫(1856-1911)によってもなされている。鳩山は、次男の秀夫(1884-1946)が、東京帝国大学法科大学の卒業を前に進路について相談に来たところ、自分がかつて大学教員の職を離れて政界に出たことを申し訳なく思っている、大学に寄附するようなもので惜しいのだが、お前は大学で教授の職に就いてくれと頼んだという。寄附するようで惜しいというのは、以下のような理由による。

凡そ学問をやる以上は、何人と雖も世界的の学者にならねばその効はない。然るに法律の方面においてはそれは困難な問題である、何となれば、その研究するところの材料が必然的に世界的であれば宜しい。だが、その研究せんとする材料はすなはち日本の法律である、これが物理学や化学等の自然科学と法律との世界的価値に於て相違して居る点である。勿論法律学においても世界的価値のある研究を為すことは不可能ではない、しかし、材料が主として世界的に共通なる自然科学と材料が主として一國、一社会に限られたる法律学とは、その世界的価値を認めらるべき発見、研究を為す

において非常なる難易の差異がある。結局において日本の法律論であり、研究である、従つて日本の法律学者たらんよりは、寧ろ自己の学問を以て活社会に出で、より以上に活動したが宜いのである²⁾。

鳩山もまた、学問を行う以上は世界に向けて研究を問わねば意味はないとする世代に属しており、しかし、自身や秀夫の修めた法律学という分野では、自然科学とは違って世界的価値のある研究を為すことは困難であると考えていた。鳩山は、イェール大学で法学博士号を取得するなど海外の法学にも通じており、また東京大学・帝国大学で教鞭をとった経験もあった。上の見解は、この経験をもとに築かれたものであった。秀夫は鳩山の言葉に従い、大学卒業直後の明治41年(1908年)に母校の講師となった。

世界に成果を問おうとして文学や法学を選んだ者たちは、自然科学のもつ「コスモポリタン」的な性格や「世界的価値」を、あらゆる学問領域が共有しているわけではないことに気づきつつあった。西洋への挑戦を志して文学や法学を学び始めても、理解が増すにつれて、自分の分野がそうした挑戦に適したものではないことを了解するようになっていった。彼らが見出した科学の特徴は、この分野の学問としての性格(方法と対象)や、それに基づいて、17世紀以降、19世紀末までに整えられた科学研究の制度(学会、学術誌など)に由来するものであった。若いうちから自然科学に近い領域への関心も深かった南方の言動には、本人の性格もあってか、漱石や鳩山が経験しなければならなかった、学問の「世界的価値」に関わる発見の痕跡は見当たらないように思われる。

5.3 田中館愛橋と長岡半太郎

南方のように科学を志しながら、将来の選択に苦悩した者の例もある。よく知られているのは、青年期の長岡半太郎(1865-1950)の煩悶である³⁾。

長岡もまた、「外国から学問を輸入し、之を日本

人間に宣伝普及するは、宿志ではありません」と後に回想する型の学者であり、目指すのは、「必ずや研究者の群に入りて、学問の一端を啓発」することであり、そうでなければ「男子に生れた甲斐がない」と考えていた。しかし、具体的にどの分野に進むかを決める際に、迷いが生じた。

長岡の在学当時はまだ文理に分けた教育を行っていなかった東京大学予備門でのことであったか、あるいは大学院進学時のことであったかは明らかではないが、将来の専門として自然科学を選んだ場合、遺伝や環境の影響で、そもそも東洋人にこの分野で成功する可能性がない、あるいは独創性がないとすれば、一生を無駄にすることになり取り返しがつかないとの疑念がきざしたのである。現在から考えれば奇妙にも思われるが、洋式の学校で手にする教科書に東洋人の名前が一切出てこない当時の状況を考えれば、それほど不思議な発想ともいえまい。

悩んだ長岡は、中国の古典をひもとき、科学に関する事項を調べてみた。中国人であれば人種的にも日本人とそれほど相違はないだろうと考えたのである。すると、『春秋』に日食や月食の記録や流星の記事があり、またオーロラや地磁気などの発見では中国が西洋に先んでいる可能性があることも分かった。幾つかの古典を見た上で、長岡は、自然科学に進んでも、必ずしも欧米人の後追いはかりをする必要はないと確信し、物理学を専攻することを決意した。ここに至るまでに、1年ほどが歴史の研究に費やされたという。

長岡は、言ってみれば、自然科学が、東洋・西洋共通の知的競争の場となり得ることを確かめたのである。予備門から大学にいた頃のこととすれば明治20年前後の話であり、漱石が科学の「コスモポリタン」的な性格に気づくのはその10年以上後のことであった。初めて本格的に西洋の学問を修得することを迫られた世代は、その西洋の学問の中にも様々な性格の違いがあることを、各人各様に見つけていかなければならなかった。

いったん競争の場を見つけた長岡は、闘争心を隠そうとはしなかった。年の近い助教授の田中館

長岡半太郎	山本金一	小島金一	伊藤清一	平沼一	大庭寛一	梶山源一	平山源一	江田虎太郎	額田豊	羽生川
長岡半太郎	山本金一	小島金一	伊藤清一	平沼一	大庭寛一	梶山源一	平山源一	江田虎太郎	額田豊	羽生川

図5.2 『東京大学予備門一覽 明治十四、五年』より、第一級一ノ組の名簿の一部。このころは文理の別はなく、長岡半太郎と平沼駿一郎が同じ組にいる。

愛橋(1856-1952)がヨーロッパに留学している間、長岡は彼に宛ててたびたび手紙を書いているが、ケルヴィン(ウィリアム・トムソン, William Thomson, 1824-1907)を「トム公」と呼ぶなど意気軒昂である。特に、1888年6月7日付け(長岡自身が西暦を使っている)の手紙⁴⁾では、田中館の手紙によって、西洋文明が底の浅いもの(superficial)であり、西洋の天狗の仕事が粗っぽいものであることを知ったと告げ、白人(the whites)の行うことであれば何であれ信頼に足るとして称賛する人々は臆病者(cowards)に過ぎないと喝破している。また田中館に対しては、自分たちの責務は、これらの白人を追い越し、彼らを打ち負かし(beat)、その本性を明らかにすることであると述べている。かつては東洋人の能力に確信の持てなかった長岡は、わずか数年後には、西洋人相手の勝負に見込みがあると書くようになっていた。

長岡の鼻息の荒さは、しかし、日本の置かれた状況を見れば、本人にとっても空元気に思われたに違いない。同じ手紙の中で、長岡は、何をすることも困窮が支配する日本では、先に進むのが困難であると嘆息してもいる。それでも、あるいはそれだからこそ、本人の決意には固いものがあり、感覚を鋭敏にして疲れを知らずに休むことなく働き、10年か20年の後には西洋人を打ち負かしたい、自分たちが死んでから子孫が勝利しているの

を、地獄から望遠鏡で覗いても仕方がないではないか、との覚悟も述べられている。白人がすべてのことにおいて優れているはずなどない (There is no reason why the whites shall be so supreme in everything)、とも語る。

では、具体的には何から始めればよいか。長岡は、まず白人に日本人の仕事を知らしめることが必要であり、そのためには、英語であれ仏語であれ独語であれ、十分に書いたり話したりできるようにならなければならないという。実際、ここで紹介した田中縮宛の手紙も、英語で書かれている。

5.4 競争的学問観

明治維新以降、農学や工業など、産業・軍事の面からの必要性が明らかな分野で西洋式の学問の導入が進んだ経緯は比較的理解しやすい。しかし、同時期に、数学や物理学など、実用的な価値の見えにくい学問の導入も進んでいる。これらは工学や農学の基礎として導入されたと考えても必ずしも当を失しているとはいえないが、そうすると、一定の期間を経た後の、例えば原子核・素粒子物理学の特に理論研究が強いといった日本の学問の特質はうまく理解できなくなる。

既にみた通り、明治維新时期の日本には、実用的な価値を度外視して学問を尊重する姿勢があり、生涯をかけてこれを担おうとする若者たちもいたのである。前回、森有礼が、学問には「純粋」と「応用」があるが、日本の現状に鑑みて後者に重きを置くべきであると考えていたことを見た。こうした文教政策の担当者の思惑をよそに、実際に学問を担おうとする若者たちの中には、初めから実用を度外視した学問を目指す人々がいた。漱石や長岡がそうであり、また彼らより前の世代の田中縮にも同様の傾向はあった。彼は、道徳や政治といった分野では日本が西洋に学ぶべき点はないと考え、誕生したばかりの東京大学に進む際には、物理学を志望するようになった。このとき、志望を問われて物理学と答えれば、当時生徒の将来を慮ることで定評のあった濱尾新 (1849-1925) 先生

が、物理や天文で飯が食えると思うかと案ずるだろうと指摘する友人に対し、飯は茶碗と箸で食べますと答えると応じたという逸話がある¹¹⁾。

さらに、純粋な学問に進もうとする若者を奮い立たせたのは、国家の安定が確実ではない状況下でも、学問の世界ならば西洋に挑戦する余地があるという意識であった。国家の指導者たちは政治や経済における国家間競争を優先したが、若者たちは、例えば森有礼がそれはまだやらなくてよいといった純粋に知的な分野の競争を、誰に勧められたというわけでもなく始めようとしていたのである。こうした事態が生ずる前提として、国家や民族に関わる自尊心と、これを知的な領域で発揮しようという傾向が、一定の数の人々の中に存在していたことを認めなければならない。長岡が、中国の古典を研究して東洋人も自然科学を行うことを確認したという事実からは、この段階では単に日本のみならず東洋 (正確には中華文化圏) を代表して西洋に立ち向かおうという意識があったと考えることもできるようにも見える。しかし、長岡の意識により忠実に見れば、日本の古典として漢書を参照したのであり、現実には日本とは異なる状況に置かれていた当時の東アジアの諸地域・諸民族を配慮したとは想像しがたい。関心の中心にあったのは、西洋との知的対峙を迫られている日本の状況であった。

学習が進むうち、しかし、あらゆる学問分野が、競争の場としてすべての人々に開かれているわけではないことも見出されていった。文学や法学は適切ではなく、一定の方法を受け入れれば、どの文化圏に所属していようが、同じ基準にかなう成果を得ることが原則としては可能であるという点で、「コスモポリタン」であり「世界的価値」をもつ自然科学が、競争のための場を提供することとなった。しかし、自然科学自体が日本の伝統からすれば異質なものであり、ましてやそこを舞台にした世界規模での知的競争などは、明治期以前のどの時代の日本人も経験したことはなかった。蘭学・洋学の伝統の影響は小さく、西洋に挑戦しようとする若者の念頭には上らなかった。世界的

に見ても、こうした挑戦は珍しいものであったと思われる。

挑戦のためであれば、西洋由来の学問を一方的に受容することに伴う屈辱感も薄れたものと考えられる。この事情は、田中縮・長岡の間でのやりとりを見れば了解できる。長岡は、英独仏語に習熟する必要があると説き、2人間の手紙は、誰に頼まれたわけでもないが英語で記した。すでに前々回・前回に、明治天皇が巡幸の際に見た英語での電信の実演を日本語に直させ、森有礼の英語採用論が種々の反発を受けたことを見たが、強いものに屈して外国語の習得が強要されることには反発があっても、知的自尊心をめぐる戦いのためであれば、能力においてそれが可能である層は、進んで外国語を習得しようとしたのである。なお、遙か後の大正8年 (1919年)、第一次大戦によって日本の版図が一気に拡大した時点で、北一輝 (1883-1937) が上海で草した『日本改造法案大綱』には、英語に代えて 에스ぺ란โต を第二言語とすることが謳われており、その理由の一つとして、世界帝国となる日本の公用語には英語より優れた国際語が相応しい旨が述べられている。ここにも、また前述のエスぺ란โต の詩で韻を踏むという中学校時代の川端康成の夢にも、外国語に関する同様の感覚を見ることができよう。

5.5 孫文の「大アジア」演説

一方で、知的競争の枠組みとして西洋由来の科学を受容するという姿勢は、科学自体に一定の、というよりむしろかなり高度な、知的権威を認めていなければ成立しない。科学とは、明治期の若者たちにとっては、そこで何が行われていても気にならないような取るに足らない領域ではなく、自らも参加して榮譽を勝ち取り、同時に民族と国家の地位を高からしめるための対象であった。この点で、例えば、後の大正13年 (1924年) に孫文が神戸で行った「大アジア主義」演説は、同じ中華文化圏に属する知識人のものでありながらも、対照的に見える科学観を提示している。

孫文の「大アジア主義」演説は、アヘン・アロー戦争以来続く中国の動乱は、西洋諸国の軍事力を用いた進出によって招かれたものであるとの観察の下に、アジアに属しながら軍事や産業において西洋文明の成果を取り入れることに成功した日本が、今後、アジアを圧迫する側に向うのか、それとも解放に貢献するのかを問うたものである。日本が今後、西洋覇道の番犬 (西方覇道の鷹犬) となるか東洋王道の干城 (東方王道的干城) となるかは、日本国民の選択にかかっているという末尾の句はよく知られている。

孫文が講演をした時点では、日本は、中国に対していわゆる「二十一か条の要求」 (大正4年) を突きつけるなど、圧迫的な態度をあらわにしており、孫文も、日本への期待は残しながらも、その対中国政策には批判を強めていた。しかし、講演前に、旧知の頭山満 (1855-1944) に満蒙における日本の特殊権益の返還について言及しないよう注意を受ける¹²⁾などの経験をした孫文は、講演では日本批判は行わず、条約改正の成功や日露戦争での勝利などの日本の偉業を称えることに終始し、日本がアジア復興の要であると論じた。

孫文が、日本はアジアのために尽力すべきであると説くにあたって論拠としたのは、文化における東洋の優位であった。孫文によれば、アジアは世界最古の文明の発祥の地であり、ギリシア・ローマの文化もアジアから伝わったという。しかしアジアはやがて衰退し、代わって強大になった西洋の侵略を受けることとなった。西洋の力の源には、科学や功利、武力を重んずる物質文明があると観察する孫文は、これを孟子 (前372?-前289) に由来する用語を用いて「霸道」と呼び、力ではなく仁義・道徳による感化に基づく支配を理想とする、東洋の「王道」と対比させた。世界で繰り広げられているのは、王道の東洋文化と覇道の西洋文化の争いであるが、孫文にとっては、道徳に基づく東洋が優れているのは明らかである。孫文も、西洋の科学や工業、技術を取り入れる必要は認めるが、それは他国を滅ぼすためではなく、飽くまでも自衛のためであると主張する。その上で孫文

は、いまや軍事と産業において西洋諸国に比肩する力をつけた日本は、仁義と道徳に基づく東洋の文化の勝利のために、西洋と対峙すべきではないかと説く。

文化において東洋が優れているとする孫文には、西洋と知的競争を行おうという発想はなく、従って、西洋由来の知的枠組みである科学を、挑戦のためであれ文化の一部として受容しようという態度も見せない。科学は物質文明の一部であり、孫文は、その成果の一部を自衛のためにやむなく受け入れることを認めるのみである。中華文明のただ中にある孫文にとって、何が文化の尺度であるかは自明なのである。

日本においても、幕末・維新期には、和魂洋才や東洋道徳西洋芸術といった言葉に見られるとおり、西洋の影響を文化の根幹たる精神的な部分に及ぼさないようにする態度は存在した。田中館愛橋も、倫理や政治において西洋に学ぶものはないと看做して物理学を学ぶことを選んだ。しかし、明治半ばに科学を舞台とする知的競争に参加する決意を明らかにした若者たちは、そのことによって、暗黙のうちにであれ、科学にはそこで競うに足る文化的価値があることを示したといえる。科学における日本人の挑戦を鼓舞するためには、科学そのものの価値の承認がまず必要であった。また、一部ではあれ西洋の産物に知的・精神的価値が認められたことにより、その価値ある部分を生んだ西洋文明の、いったいどこに秘密があるのかを探る、際限のない行程への入口の一つが開かれることにもなった。

「大アジア主義」講演を見ると、西洋の力に曝された時間も短く程度も小さかった日本で、中国よりも迅速に西洋文明の精神的な価値の評価がなされた主要な理由の一つが、日本が中華文明圏の中でも辺縁にあったという事情にあることが理解できる。辺縁にあった日本は、比較的容易に中華文明を離れて西洋文明に参加することができた。西洋に対抗し得る価値観の発祥の地である中国ではこれは困難であり、また中華文明への所属度の高い朝鮮においても同様であった。

5.6 ベルツの在職二十五周年演説

自然科学を日本に伝えた西洋人にとっても、挑戦を通じた科学の受容といった事態を想像することは困難であったようである。孫文の演説に先立つこと23年、明治34年(1901年)に行われた、医師ベルツ(Erwin von Bälz, 1849-1913)の演説¹³は、日本の世界における立場や固有の文化を尊重することにかけては日本人よりも積極的であった西洋人でさえ、科学について語ると、西洋からの精神の導入の必要を説く論調となることを示している。

ベルツは、明治9年(1876年)に東京医学校での勤務を始めて以来、内科学を中心に医学教育に従事し、日本固有の疾病の研究や人類学・民族学的な日本の紹介も行った。明治憲法発布の祝賀の様子を描写しながら、「だが、こっけいなことには、誰も憲法の内容をご存じないのだ」と記した明治22年(1889年)2月9日の日記の文句はよく知られているが、彼の観察の大半は、高みから見下ろす傲慢さではなく、西洋化を急ぐあまり無理をする日本への配慮に基づいている。在職25周年を記念して明治34年に行われた講演も、本人は厚意に満ちた忠告であると理解していたが、だからこそ、そこにはごく自然に、この時代の西洋人の科学観と日本観が表現されているように思われる。

ベルツは、日本人は西欧の学問の成り立ちと物質について大いに誤解していると指摘する。日本人は、西洋の学問を、簡単にほかへ移して稼働させることのできる機械のようなものであると考えているというのである。ベルツの見解では、西洋の学問は固有の歴史と文化を土壌として育った有機体であり、そこにはピタゴラス、アリストテレスからファラデー、ダーウィンに至るまでの苦闘の跡が刻まれている。この成果はアレクサンダー大王によってアジアにももたらされ今日もその影響を見ることができると、対するに、同じ世界を国を作ったモンゴルの支配の跡には見るべきものはない。ベルツの見るところ、全世界に広がる文化を生むことができたのは西洋なのである。

ベルツは、西洋の学問を受け入れようとする日本に協力してきたが、彼を含む西洋人の教師たちが、学問の樹が日本の土壌の上に育つよう努めてきたのに対し、日本人たちは学問の果実の切り売りのみを求めているように見えることを嘆く。そして、今からでも遅くはないから、外国人を利用して、西洋の精神をこそ吸収すべきであると勤めるのである。

純粋な厚意に満ちてはいるが、20世紀初頭の西洋人は、他民族に対して自分たちの精神を受け入れよと勤めてはばかりことがなかつたことが分かる。長岡ならば、挑戦するために必要な最小限の部分は受け入れるが、それ以上については、白人の行うことがすべてよいとは限らないと反発したかもしれない。孫文であれば、西洋の精神は東洋の土壌には根付かないとはねつけたかもしれない。しかし、ベルツにとっては、西洋の学問は世界に広がるべきものであり、他地域の人々は、学問とともにこれを支える西洋の精神をも学び取らなければならぬのであった。

ベルツの指摘は、しかし、挑戦のためであれ西洋の学問を選んだ人々の一部にとっては、挑戦のために必要なものの底知れなさを窺わせる効果があったかもしれない。挑戦にむけて科学研究を行うために必要な知識や訓練がどの程度であるかは、外国人の教師や教科書、雑誌などから知ることができよう。ところが、そこからさらに進んで、西洋人を瞠目させるような成果を得るために必要なものが何であるかは、容易に知ることができない。ベルツの言うとおり、西洋の精神を吸収しなければならないとして、それは果たしてギリシア・ローマの文化なのであるか、それともキリスト教なのであるか、あるいはさらに別の何かなのであるか。競争を介してであっても、いったん精神的な要素の受容の口を開いてしまえば、競争での成功が目に見えて明らかになるまでは、あるいは明らかになったあとでも、吸収のための際限のない模索が続く可能性はあった。

なお、ベルツに対しても、また孫文に対しても、聴衆は心からの歓迎の意を表して拍手を送った。

孫文の場合には、日本語の新聞では賞賛を、英字新聞では批判を掲載するという狡猾さ(とそれを外国人に指摘されるという不用意さ)も見られたが、それにしても、西洋の精神を学べという声と、東洋の道徳に還れという叫びの両方に、決して欺瞞的ではない賛意を覚えるという点に、明治維新以降日本が置かれた文化的な位置の面白さがあるように思われる。ただし、どちらかの選択を迫られる事態に至れば、面白さは途端に過酷さに転ずるのである。

今回は、西洋への挑戦に向けた意志をもとに、明治半ばの若者たちが西洋型の学問の吸収を目指したこと、およびその過程で、次第に科学が挑戦の舞台として適したものであるとの認識が生じていった経緯を明らかにした。次回からは、具体的な人物や個別の出来事に即して、明治以降の科学の受容がどのようになされていったかを論ずることとしたい。

参考文献

- 1) 夏目漱石「談話(時機が来てみたんだ)」、『漱石全集』第二十五巻(岩波書店、1996年)、279-283ページ。
- 2) 飯倉照平『南方熊楠』(ミネルヴァ書房、2006年)。
- 3) 柳田國男宛書簡、明治44年11月17日、飯倉照平『柳田國男 南方熊楠 往復書簡集』(平凡社、1976年)、156-171ページ。
- 4) 川端康成記念会編『川端康成全集』補巻一(新潮社、1984年)、286ページ。
- 5) 夏目漱石、前掲、「談話(時機が来てみたんだ)」。
- 6) 『漱石全集』第二十二巻(岩波書店、1996年)、237-238ページ。
- 7) 夏目漱石『文学論』(上)(下)(岩波文庫、2007年)。
- 8) 鳩山春子編纂・発行『鳩山の一生』(1929年)、46ページ。
- 9) 板倉聖宣・木村東作・八木江里『長岡半太郎伝』(朝日新聞社、1973年)、39-44ページ。
- 10) Kenkichi Koizumi, "The Emergence of Japan's First Physicists: 1868-1900", *Historical Studies in the Physical Sciences*, 6 (1975), pp.3-108.
- 11) 中村清二『田中館愛橋先生』(中央公論社、1943年)。
- 12) 陳徳仁・安井三吉『孫文・講演「大アジア主義」資料集』(法律文化社、1989年)。
- 13) ベルツ「大学在職二十五周年祝賀会における挨拶」、エルヴィン・ベルツ著、若林操子編訳、山口静一・及川茂・池上純一・池上弘子訳『ベルツ日本文化論集』(東海大学出版会、2001年)、433-442ページ。
- 14) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記(上)』(岩波文庫、1979年)。

(おかもと・たくじ、東京大学大学院総合文化研究科)